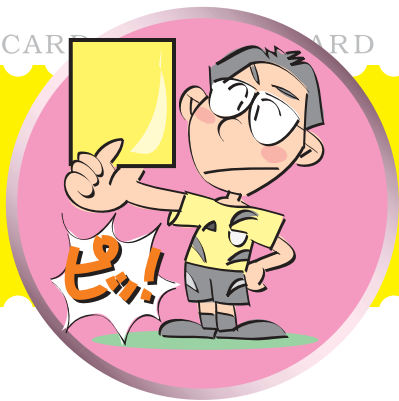


清水こういちろうの イエローカード!



これは京都伏見みず病院グループ理事長・清水鴻一郎が、医療・介護・福祉の現場はもちろん、現在の日本が抱えている様々な事柄へするどく斬りこみ、問題提起するコラムです。



第五回テーマ

「社会保障を後回しにする定額給付金にイエローカード！」

麻生内閣が追加経済対策の目玉として掲げる、総額2兆円の定額給付金が波紋を呼んでいる。二転三転しながらようやく決定した支給額は、1人あたり1万2000円。さらに18歳以下の子どもと65歳以上の高齢者には8000円を加算する。定額給付金は、国民の生活支援を目的に打ち出された政策だが、本当に国民の生活を支援するのであれば、この2兆円をもっと有効に活用すべきではないだろうか。

政府は財政危機を理由に、医療費や福祉費などの社会保障費を年間2200億円削減しており、その結果、不十分な医療体制が国民の不安を拡大させている。医療崩壊の原因の第一は医師不足であり、OECD加盟国30カ国の医師数の平均値は、人口1000人当たり3人。それに比べ日本の平均値は、受診数も多く、世界最長の長寿国であるにもかかわらず、2.1人。したがって医師1人の負担が大きく、なかでも救急医療は十分に機能していないのが現状だ。さらに厚生労働省は、2012年に介護療養病床13万床を全廃する方針を固めており、13万人もの介護難民の受け皿となる高齢者施設や高齢者住宅の整備や、人材の育成や雇用など、今後も医療・福祉の問題は山積みである。

確かに定額給付金は、100年に1度の大不況に対するカンフル剤になるのかもしれない。しかし2兆円を定額給付金ではなく、年間2200億円削減されている社会保障費に補填すれば、8~9年間、国民は安心して暮らすことができるのではないだろうか。少子高齢化が加速するなか、大切な命を守っていくためにも医療・福祉の環境整備を最優先するべきだと思う。

